

第三卷 あらすじ

ルイとキマとその子によって、この国にやって来た理由を悟ったサムは、廃墟の町に住むことを決意して、コボルの人々の心の中を支配する、苦しみの声を聞いてあげたいと歩き回ります。

そしてどんな人の話も嫌な顔せず聞き届けるサムは、10年が過ぎる頃には「キング」というニックネームで呼ばれるようになりました。

しかしサムは、話を聞くことしかできない、苦しみに光を与えることの叶わない自分に苦しみます。『……今のわたしの力では、国へ還ったとしても、何もできるはずはない！』という思いは、やがて……人を救おうとしていること自体への、疑問に変わります。

『そもそも、人間に人間を救うことなど許されるのか？ ……心の病を癒やし、魂を救うことができるのは、神のみに許されることではないのか？』サムは、人間の心の中に現れる光と影の狭間を行ったり来たりします。

そして、闇の中の永くて辛い戦いの中で、『その心の中の闇にこそ光は在る！』と確信したサムは、人々に向かい、訴え掛けを始めます……

そして、次第にサムの「ことば」がコボルの人々の心の中に届きだしたころ、大事件が勃発し、サムとルイはその首謀者として捕らえられ牢に繋がれてしまいます。

牢獄の中で拷問に曝されるルイは、遠ざかる意識の中で、過去の記憶を辿りながら、「マガラ」誕生の秘密を回想します……